

ドイツ語構造把握の諸相

—学習の現場ノート— (1)

Aspekte des Begreifens von der Struktur der deutschen Sprache

—Anmerkungen an Orten des Lernens— (1)

宮永義夫

Yoshio MIYANAGA

1. はじめに

本論は本来、『ドイツ語音韻把握の諸相(3)』として書かれる筈のものであった。しかし、(2)の続きとして、そのまま書くには、いささか、時間が経過してしまったことによって、関心の中心がずれて来たことと、細部に没入する前に、絶えず俯瞰する視点を確認する必要に迫られたのである。その為、改めて『ドイツ語構造把握の諸相(1)』として、より大きな視点からの論を展開することにした。そもそも『構造把握の諸相』は、必ずしも新しい知見を提示する学術論文を意図したものではない。それ故「ノート」であって、知見そのものは既知の事柄である。問題は、その知識があまねく流通していないところにある。それ故、「学習の現場」という修飾を付けた。「教育」や「学び」という用語を考えない訳ではではなかった。なぜ「学習」であるか、ということについて、縷々述べることは、隔靴搔痒、迂遠的の誹りを免れないとしても、本論の根幹をなす思惟であるので、折りにふれて、立ち戻って来ようと思う。

それぞれの用語には、専門分野では定義があるかもしれないが、筆者が考えるところでは、「学び」はいささか感性的であることと、「学習」と言えば、「学び」と「習い」が包括されていて、態度、過程、結果を纏める意味がある。これによって「教育」とある程度対応するものにもなる。「学習」は直接的には、「教え」に対応するものである。「学び」は「教え」が積極的になくともあり得る事態であり、「習い」が「教え」の対応概念である。しかし、「習い」と共に「学び」も起こる。「育み」は、「学び」の環境整備であり、触媒である。

言語(具体的にはドイツ語)の学習過程において、流通が滞っていると考えられるのは、主に「学び」の部分である。教育者も学習者であって、ある程度の時間の差によって教育者たり得ている。その先行した、ある程度成功した学習者である教育者が、一度その立場によって教育者となると、教育を放棄するようになる。本来なら気圧の高いところから低いところへ風が流れるように、学びが濃いところから薄いところへ移行していく筈のところ、何故か停滞している。恐らくは、教育者が学習者であったことを忘れているか、更にいえば「習い」の連鎖だけが起きているのかという疑いを持つ。未だかつて広範には「学び」の連鎖がなかったのかも知れない。学校の制度の中では主に「教え」と「習い」の連鎖の中に「学び」が乗らなくてはならないのは事実である。従って、ドイツ語という言葉を教え、教わる場は、望むらくは「学習」の場であって欲しいのである。

筆者が考える理想的な言語学習のいわば「諸相」は、以下の10の相に纏められる。

- 1) 異文化を受け入れる開かれた心を養う訓練 (しつけ)
- 2) 言語を取り巻く自然(風土)・文化・社会 (言語環境) を理解する訓練
- 3) 言語構造を理解する訓練
- 4) 言語運用を理解する訓練
- 5) 言語を運用する訓練
- 6) 語られた (書かれた) 内容を理解する訓練
- 7) 語るべき (書くべき) 内容を獲得する訓練
- 8) 語る (書く) 人を全体として理解する訓練
- 9) 自らの語る内容と行為が及ぼす影響を理解し、配慮する訓練
- 10) 言語使用が最終的には、争い、滅びへと至らしめる道具ではなく、融和、協力、生き延びるための道具となるように努力し、配慮する訓練

この中で「理解する」という用語を用いたところがあるが、「理解した」結果は「知識を得る」ということに他ならない。「習うより慣れろ」というスローガンで、語学学習においては、とすれば知識を軽視しがちである。勿論、最終的には訓練をすることによって技術 (スキル) として身につけなければならぬ。しかし「学び」の蓄積は広い意味の「知識」である。以下に、この10項目を敷衍していく。

- 1) 異文化を受け入れる開かれた心を養う訓練 (しつけ)

そもそも言語学習は異文化理解であり、それは当然のことながら同時に、他者理解である。閉じられたコミュニティであれば、異文化の摂取は必要なく、幸福か否かが基準であれば、異文化受容ということが必ずしも当然という訳ではない。異文化とのコンタクトが必要であり、それを理解することが、即ち他者理解ということが善であるという「育ち」をしなければ、外国語学習はそもそも困難であり、必要もない。

このことに関連して、本論の変容に大きく寄与したことがある。同僚との会話において、筆者は上に述べた、ドイツ語教育、更には第二外国語教育、外国語教育、言語教育における「学び」の滞りへの懸念について触れたところ、その同僚は外国語を習得することは喜びであり、その運用は楽しいはずであるにもかかわらず、何故滞るのかという問いを發した。筆者はその前提に与することが出来なかった。ここに外国語学習、異文化理解に対する、大きく異なるアプローチがあることを思い知ることになった。これは、個々人の資質に関係していると共に、現今の社会のあり方そのものによって「学び」の停滞が起こっているという懸念へ筆者を導くものであった。

- 2) 言語を取り巻く自然 (風土)・文化・社会 (言語環境) を理解する訓練

これは、ドイツ語教育でいう Landeskunde である。鈴木孝夫は学習の対象としての言語を、目的言語、手段言語、交流言語の3種に分類した。目的言語とは、その言語を持つ社会と固有の文化を理解しようと努め、その言語の使用者と直接交わろうとする為に学ぶ言語である。手段言語とは、その言語に、謂わば人類普遍の知識が蓄積されており、その知識を得るために学ぶ言語であり、交流言語とは、お互いの母語を知らない者同士が意思の疎通を図ろうとする時、共通の外国語として選ぶであろう言語であって、そのようなものとして学ばれる言語である。現今の情勢では、交流言語とは世界的規模で

見れば、英語であり、英語に知識が最終的に蓄積されれば、最も伝播しやすいことから、手段言語も実質は英語である。現状はどうあれ、原理的に見て、手段言語や交流言語では個別文化に踏み込む必要はなく、むしろそのようなバイアスは望ましくないとと言える。風土、社会、文化の中の言語、ないしは、風土、社会、文化としての言語という側面を捨象する学習があり得ることは認めなければならない。これは人の行為としては言語を見ないということであり、大系としてそこにあつて、それを借用して、道具として使うということである。

3) 言語構造を理解する訓練

これこそが言語学習の根幹でありながら、余り顧みられることのない相である。先に触れたように、「理解する」とは「知識を得る」ことである。その前に理解する為の訓練が必要である。別の言い方では、「センスを磨く」ことである。言語構造の事実が厳然とあり、それを教え、習えば、事実の習得は成立した、と見てもよいのであるが、学びにはならない。何を言語構造の知識とせねばならないか、例をもって示す。

動詞の三基本形として、不定詞、過去基本形、過去分詞を並べて記憶することは、定まった課程である。その際、規則動詞（弱変化）と不規則動詞（強変化、混合変化、その他）と分類する。弱変化であれば、□en、□(e)te、(ge)□(e)t となり、強変化は、□en、△、(ge)○en、混合変化は□en、△te、(ge)△t となる。これは習うことである。ここで学んで欲しきことは（学ぶべきことというのはない）、口調上の e というものは弱変化にあつて、混合変化にはないという認識である。ということは、arbeitete のように、口調上の e を伴うものは弱変化であると理解出来る。また、過去形と過去分詞がそれぞれ、-te、-t に終わるものは、規則動詞も不規則動詞もあり得るが、そうでないものは不規則動詞に限られる。強変化の過去基本形は語幹のみとなるから、形態からのみ言えば、命令形である可能性もある。過去分詞が -en に終わるのは、強変化のみであるから、当然、不規則動詞変化表に（基本的動詞ならば）記載されていることになり、簡便に不定詞に行き着ける。

弱変化は規則動詞であるから、基本規則によって変化し、個別に記憶する必要はない。とすれば、記憶すべきは混合変化動詞ということになる。このような過程は、単純な法則からこぼれ落ちる例外をすくい上げて、より広い法則性の中で捉え直すということである。ターゲットが混合変化であることが分かれば、不規則動詞変化表から混合変化動詞を抽出すればよい。するとこれも法則性によって少数の分類と量で済むことが分かる。即ち混合変化動詞とは、不完全な形で、話法の助動詞が当てはまり、その他に -ennen 型、すなわち、brennen、kennen、nennen、rennen、-enden 型、すなわち、senden、wenden、その他、bringen、denken、wissen が当てはまる。これらの動詞とそのバリエーションさえ承知すれば、後は安んじて規則変化だと思えばよい。

強変化動詞も法則化して分類することに挑戦する価値がある。個別に覚えるのではなく、法則性によって、不定詞から過去形、過去分詞が導きだせれば、習得したことになるのである。その典型的な例は、不定詞の幹母音が ei のものは ei-ie-ie となるか、ei-i-i となる。この区別も比較的簡単に分かる。ei の後ろの子音が無声音であれば、短い i に変化する。このパターンにならない、唯一の例外が heißen-heiß-geheiß であり、ei 有声母音型の 2 つの例外が、同じパターンとなる、schneiden-schnitt-geschnitten、leiden-litt-gelitten である。

弱変化においても、口調上の e から導かれることは少なくない。不定詞をはじめ、-en が一般的には多数とされる語尾も、-eln、-ern などのヴァリエーションを見れば分かるように、実質は -n であって、e は口調上の e であると言える。鳴音である n は母音ないしは有声音に繋がっていさえすれば発音でき、繋がっていなければ発音されない。反対に過去語尾 -te に見られる e は口調上ではあり得ない。なぜなら、有声音の存在を前提としないからである。e が予め存在するので、過去形の 1・3 人称複数 は -n だけの語尾でよいのである。弱変化と強変化のそもそもの違いは、周知のように、時制変化の方式の相違である。本来の時制は母音交替 (Ablaut) によるものであって、即ち強変化である。何らかの源から動詞へと派生したものに対して活用を与えるものが語尾 -te であり、弱変化となった。最終的解答は得られていないようであるが、-te は tat に由来するとも言われる。ここで問題を広げれば、tun の過去分詞は getan である。弱変化の過去分詞語尾は -t であるから、語幹に getan の縮約された形が付いているとは、考えにくい。英語を見れば、規則動詞については過去、過去分詞は同型で、-ed の語尾を持つ。すなわち区別されない。これはドイツ語においては人称変化を考える上でも重要性を持っている。過去形も過去分詞もいふならば、did のみで作られている。ドイツ語では tat が付いているということである。英語において、規則動詞は、過去形と過去分詞は同型である。しかしドイツ語の弱変化の一般的な把握は、過去基本形 -te、過去分詞 -t と微妙に異なる。ドイツ語学習者はこのことを既定の事実として受け入れるのではなく、特異なものとして注目してもらいたい。ここにも学びがある。

英語の -ed はドイツ語の -t に対応していると考えるのが自然である。それならば何故過去基本形が -te であるのか。考え易いことは、それによって強変化と整合性が出来るからである。強変化は 1・3 人称単数で語尾がない。その変化 (即ち過去人称変化) に対応するするには、-te まで語幹とするといのである。煩雑さを厭わなければ、-e を語尾とする方がよい場合もある。別の意味で口調上の事柄と言えるのであるが、接続法は全ての人称語尾に e を挟んでいる。伸張形とでも呼べるものである。弱変化の過去形の場合、-t のみでは、現在形 3 人称単数、と区別が出来ない。3 人称単数は現在過去が同型になり、そこに 1 人称単数が加わる。区別がなくとも困らないとは言えるのであるが、ドイツ語は区別をする方向へ進んだのである。これを包括的に言えば、ドイツ語の人称変化には、全てに語尾が付く現在型変化と、1・3 人称単数で語尾がない過去型変化があり、発音上必要なところに e を挟む場合と、全てに e を挟む場合がある。過去形については、強変化は e を挟まず、弱変化は e を挟むタイプになる。混合変化は更に複雑であるが、助動詞の変化など、過去現在人称変化が考察の中心になる。

4) 言語運用を理解する訓練

「運用を理解する」こととは、科学的トレーニング法の知識を得る、ということである。既に述べたように、三基本形において記憶が必要なところは、何が混合変化動詞であるか、ということである。ここへ至る道筋は、この「言語運用の理解」によってもたらされるものである。決して順序を追って段階的に遂行されるものではない。運用の理解によって、構造の理解が進むのであり、またその反対も同時にある。Guten Tag は「こんにちは」に対応すると共に「よい日を」に対応する。2) の社会理解から連続して、本来の意味の痕跡を構造として把握しながら、挨拶としてのイディオムとしての運用を訓練する、といった配慮もこの相に入るであろう。

他の例を挙げれば、副詞や助動詞による話法 (Modus) の変換も、具体例の訓練の前に一般化、法則化する必要があるであろう。確率表現もその一つであり、müssen (100%) は、「に違いない」すな

わち「可能性が1つしかない」、80%前後では *werden* になる。これはいわゆる未来形とされるものであるが、本来「生成・変化」を表す *werden* に推量の意味はない。「～になる」と宣言しているのである。従って話者に疑いはないのだが、事実として確定してはいないということを表している。このことを多少一般化して応用すれば、語の意味は中心的なイメージに還元するのが学習である。そのイメージを場面場面に応じて使い分ける訓練をするのは、運用の訓練である。イメージが分裂して、一つに纏まらなければ、語源的な事実はさておき、別の単語であると見なしてもよいのではないか、と思われる。

確率50%以上程度で使われる *mögen* は、この還元のよい例である。辞書的には、「だろう」と「好む」に大別されている。これを繋ぐ統一的イメージは何であろうか。この階層の理解が構造の理解であり、外界の意味として言語に取り入れられ、表出される、その回路を設計し確保することが運用の理解であり、そこに情報を流すことが運用である。イメージは、自ら作り上げないと利用できないものであるが、筆者が持ち合わせている「教え」られるイメージは「傾向」である。心がそちらへ向かっている傾きであり、状態の傾向として多数を示している。30%前後まで下がると *dürfen* の登場となる。本来の中心的意味がそのままイメージになり得る。すなわち「許されている」ということである。これが「言ってもよい」に変容するのは容易である。状況は整っているのである、ということから、実際は違う場合も含まれる。Er darf 50 Jahre alt sein. という表現を眼前にした時、2つの意味合いを感得する必要がある。状況は彼が50歳であることを示しているのであるから、50歳であることを推定している文としても捉えることも出来るし、状況（例えば容姿）はそうであるのに事実は違うということの意味しているのかも知れない。話者が予め事実を知っていたかどうかによっても、意味は違うのである。これは後出の6) 7) 8) 9) あたりまで関連してくる事柄である。

können は20%以下程度で使うものであるが、元来「可能性がある」という意味であるから、「可能性がない(0%)、nicht können」でなければ、全てあてはまる。言語的に低い可能性で使用する助動詞は、論理的には可能性の幅が広いということの意味するわけであるから、高い可能性も含むことになる。しかし、高い可能性を示す語を選択せず、あえて低い可能性までを示す語を選択したということは、8) などの高次の理解を必要とするが、可能性が高くないことを含意する。日常の言語行動においては常識の範囲ではあるが、外国語の場合は意識的な使用が必要なことがあり、必ずしも容易なこととは思われない。可能性が数パーセントというような低い確率の表現においても、論理上は可能ではあるが、これは「殆どない」という準否定表現の範囲になるであろう。従って、可能性の低いほうも自ずから限度があって、運用上は10%を下回るような確率の表現には肯定形は使用しないと思われる。

副詞では、*sicher*、*wohl*、*möglicherweise*、*vielleicht* などが確率的表現を担うが、このうち *vielleicht* はちょうど *können* に対応する低い確率を表現する。この語の運用上の知識としてほぼ必須であるのが、誘いに対する拒絶になる点である。*vielleicht* のイメージ用意味としては、「ひょっとしたら」が代表的なものであるが、可能性がないわけではない、という含みであって、これが運用上は、否定として、可能性はないものと思え、の意になる。構造上の位置、つまり「よい日を」の相が「可能性あり」であって、運用上、すなわち「こんにちは」の相では「可能性なし」になるわけである。

5) 言語を運用する訓練

実際に体で覚え込ませる相である。ここについては、教授法等様々な論考があり、筆者の関心も専ら、それより基礎的な広い意味でのトレーニングにあるので、この相そのものについて多くを語ることは

出来ない。一つ取り上げたいのが、rの発音に関して4)の知識と5)の運用を繋ぐアイデアである。

rの発音は本来の発音と、母音化された発音に大別される。本来の発音については、舌先震え音（いわゆるべらんめえ）と口蓋垂震え音に大別される。標準とされる口蓋垂震え音は調音点、調音法共に独特のものであって、音韻大系のなかで孤立した存在である。しかし聴覚印象や、近接する調音点などを勘案すると、あくまでも「見なし」の域をでないが、発音運用上、便利な捉え方（構造理解）がある。

軟口蓋音としては、破裂音の/k/、/g/が無声有声ペアとして存在するが、摩擦音ではch/x/のみが存在する。これは無声音であって、有声音が欠けている。実際の発音からはrの摩擦音化もよく起こることが知られ、口蓋垂の震えは、共鳴が成功した時に見られる変異とも捉えられる。/x/との違いは、本来鳴音であるはずの音であるので、有聲である。即ち、仮にrを軟口蓋有声摩擦音とすれば、特殊な音把握が消え、整合性が高くなり、運用の利便性も高まるのである。

軟口蓋音	
有聲	無聲
摩擦音(/r/)	/x/
破裂音 /g/	/k/

一方、rは音節末側へ行くと母音化する。これも実際の運用においては、母音化度に段階がある。これを法則化することを試みる。この試みが3)、4)、構造から運用にかけての理解を目指す実践である。

1. Rは音節頭 はい× いいえ2
2. 先行母音はa はい× いいえ3
3. 先行母音は曖昧音 はい4 いいえ5
4. 後続子音は、なし、ch、s、schのいずれか はい◎ いいえ○
5. Rは音節末尾 はい6 いいえ8
6. 先行母音はe はい7 いいえ9
7. Rは語末 はい○ いいえ9
8. 後続子音は、ch、s、schのいずれか はい○ いいえ×
9. 先行母音は長音 はい○ いいえ×

○の時、母音化し、◎は前のeと一体の母音化を表す。

ここで音韻把握についての話題を続けたい。本論の原点である、『ドイツ語音韻把握の諸相(3)』で用意されていた論考である。以下は、3)の構造理解の相に最も対応する。6)～10)については、続編の中でふれることとする。

2. 変化語尾と音韻把握

音韻把握に関連して、ドイツ語の活用(曲用)変化語尾の特質として学習者が是非把握すべきことは、その音韻の多様性の欠如である。これはドイツ語の強い強勢アクセントに原因するものと思われる。強勢のない音節、すなわち接辞的音節の母音は曖昧化し、文字としてはeの受け持ちとなってい

ることが多い。

品詞の活用は、動詞の活用、すなわち最終的には人称変化となるものと、名詞系列の曲用、すなわち性数格変化に大別される。動詞の人称変化について、初級文法のごく一般的な説明としては、3つの人称と単複の区別から6変化を言う。これを *-e*, *-st*, *-t*, *-en*, *-t*, *-en* と称し、このヴァリエーションとして、口調上*e*を加えるものと *-st* の *s* を省くものがあるという。しかし、そもそも *-en* である1人称と3人称の複数の場合も、大多数がこの変化形であるため、これを基準とすることが行われているが、*n* はそもそも鼻音である鳴音であるから、原則として母音と連続していなければならない。人称語尾として意味があるのは、*-n* だけであって、*e* はやはり口調上の *e* なのである。ということは、動詞において語尾というのは、不定詞、分詞を含めても、*-e*, *-st*, *-t*, *-n* だけの变化である。ちなみに、伝統的な動詞の活用カテゴリーは3種の法(直説法、接続法、命令法)、3種の時制(現在、過去、未来)、2種の相(継続・非完了、完了)、2種の態(能動、受動)、3つの人称、2つの数(単数、複数)に分かれており、文の定動詞はこれら様々の要素の組み合わせによって1つの形に定まっている。

これら全ての組み合わせをただ掛け合わせてしまえば、216になり、1つの動詞から216の定形が生み出されることになるが、勿論、同型が存在してもある程度は差し支えないから、数はそもそも定まらないし、実際の組み合わせには制約がある。未来時制、完了相、受動態はそれぞれ助動詞によって表され、動詞の形としては存在せず、命令法は2人称だけの法であり、過去時制がない。従って全部で26通りである。これに、不定詞、現在分詞、過去分詞を加えると、29となる。更に、現在分詞と過去分詞は性数格変化をする可能性がある。

名詞系列の性数格変化としては、まず名詞の格変化に使われる2格の *-s* と弱変化の *-en* が代表的なものである。*-en* を最末端の子音だけで表せば *-n* である。複数形の多数派語尾は *-e*, *-er*, *-(e)n*, *-s* であり、これも末尾子音のみにすれば、*-e* の他に *-r*, *-n*, *-s* となる。特殊形として *Themata* や *Examina* のように、由来はいくつかに分類されるけれども音韻としては *-a* に終わるものとしてまとめられるものなど、多少広がりを見せるが、それでも多くは *-n* に集約されてしまう。複数3格で *-n* が付加されるものがあるが、結局 *-e* が *-en* になり、*-er* が *-ern* となる変化に収まってしまふから、末尾子音としては *-rn* を加えればよい。名詞付加語である冠詞類と形容詞の性数格変化については、概念上は、3性、2数、4格の組み合わせであるから、24通りあるが、複数において、性の外見上の区別が失われるというドイツ語の特徴によって、16通りになる。これに対し、示格強変化と弱変化の2種の変化パターンがあるが、これも *-e* の他は *-r*, *-s*, *-m*, *-n* である。形容詞、副詞の比較級、最上級を加えても、*-er*, *-st* であるから、多様化には寄与しない。

これらの様々な変化語尾を総合しても、使用される末尾子音は *-m*, *-n*, *-r*, *-rn*, *-s*, *-st* に止まる。ここで少し拡大して、広い意味の名詞の接尾辞的音節を加えれば、その代表的なものは曖昧母音の *-e* であり、子音の付加されたものは、*-el*, *-en*, *-er* が大多数を占める。*-l* だけが種類を増やすのに貢献している。これらを複数にする場合は、無語尾式か *-n* 式となるから、*-ln*, 既出の *-rn* の登場となる。

「ドイツ語の音韻把握の諸相(2)」[以下、単に(2)と記す]で指摘したように、子音結合の可能性の考察は、音節間の分節点の解明への要求であり、これは形態素、語彙のレベルで蓄積されていくものではあるが、あくまでも、音韻レベルでの解明を目指すことによって、むしろ語彙構造そのものも見えてくると思われる。しかし、ここではひとまず語彙を前提にして、一般的な接尾辞を考える。

思いつくままに挙げれば、-ung, -nis, -in, -schaft, -heit, -keit, -ig, -lich, -or, -isch。他にもいくつもあるであろうが、ここで新たに加わった末尾子音は -ng, -ft, -g, -ch, -sch である。声門閉鎖のない母音から始まる接尾辞と子音から始まる接尾辞では音節形成の振る舞いに違いがあり、頭子音型接尾辞は独立した形態素と見ることが容易であるのに対して頭子音を持たないタイプは、音節頭に前の子音を要求するから、音節の切れ目とずれが生じ、したがって形態素としても確定しがたいことになる。頭子音型はつまり、単語と同じことになり、1音節であっても、強勢音節と見なしてもよい。この場合の末尾子音は、少なくとも単音では、制約なく様々な音が可能だろうと思われる。上に挙げた頭子音をもたないタイプだけでも、制約は見て取れる。この範囲では -ng[ŋ]、-g[ç]、-sch[ʃ] があてはまることを言っているに過ぎないが、その意味するところは大きい。

ドイツ語の形態論的变化語尾の末尾子音は -m, -n, -r, -rn, -s, -st, -t にほぼ集約されるが、実際には語幹に属する子音と結合して、鳴音－摩擦音－破裂音の順序となればよいから、多少可能性は広がる。これを見ると、末尾子音の選択には特質的傾向があることが分かる。着脱性の変化語尾の末尾子音にはかなり強力な制約があり、これを接尾辞全体に広げてみても、さして選択可能性は大きくならない。まず選択されるのは、鳴音である。しかし l は変化語尾にはない。その他には、摩擦音に属する s と破裂音の t である。着脱性の変化語尾ではない、品詞形成型の語尾へ目を向けても、[ç] 系列と -sch が加わり、摩擦音が少し広がる程度である。

多少仮説的想像ををまじえて考察すれば、そもそも末尾子音に適性を持つのは鳴音と摩擦音なのである。それを象徴しているのが文字の名称そのものである。アルファベット名は、母音を後に伴うものと前に伴うものに分かれる。母音先行型子音字はすなわち、F, L, M, N, R, S, X で、鳴音をすっぱり包含する形となる。F と S が摩擦音で、X だけが破裂を含む。摩擦音で母音後続型なのは、H, J, V, W である。摩擦音は、(2) で指摘したように、2次的に接触性のものと非接触性のものに分かれる。F, V, W が接触性であり、いずれも唇歯音である。一方、非接触性の H, J, S の内、H と J は音節頭のみで発音される。F の名は、音節末音としての唇歯摩擦音を表しているが、着脱性の変化語尾にまでは分布しないのである。代表的な唇歯摩擦音の末尾での使用は、形容詞形成語尾の -iv であろう。単独字としては S のみが非接触性の摩擦音として幅広く活躍する。複合字による単独摩擦音は非接触性の -ch と -sch があり、音節末に広く分布するが、字の成り立ちの由来を求めれば理解されるように、双方とも破裂音からの変化を経過しており、変化語尾にまでは進出していない。—続く—

3.(1) の終わりに

注、参考文献等は全体の末尾に掲載する。